



InstallShield 2015 Express Edition リリースノート

(オリジナル リリース 2015 年 6 月、SP2 を含むアップデート リリース 2017 年 7 月)

はじめに	2
SP2 に含まれる変更	2
FlexNet Code Aware との統合	2
バグ修正 SP2.....	8
SP1 に含まれる変更	9
Windows 10 のサポート	9
Microsoft Visual Studio 2015 のサポート	9
Microsoft App-V 5.1 のサポート.....	9
新しい App-V 5.1 用 InstallShield 前提条件	9
App-V アシスタントの [オペレーティング システム] オプションについて、App-V 5.x バージョン用に Windows 10 を追加.....	9
Microsoft Visual C++ 2015 および .NET Framework 4.6 用の新しい InstallShield 前提条件	10
DialogSetInfo 関数の新しい定数.....	10
アーキテクチャの検証を無効化するオプションの追加.....	10
バグ修正 SP1.....	11
新しい機能.....	11
Windows 10 ベース システムのサポート.....	11
Windows 10 をターゲットにする	11
デジタル署名の強化機能	11
SHA-256 デジタル証明書のサポート	12
証明書を参照するときに証明書ストアを使用できる機能.....	12
UAC ダイアログ ボックスにプログラム名を指定できる機能	13
64 ビット開発システム上で、ソース マシンのレジストリの 32 ビットおよび 64 ビット領域の両方を表示できる 機能.....	13
新しい Microsoft Visual C++ 2013、.NET Framework 4.5.2 その他用の InstallShield 前提条件	13
Internet Explorer 10 および 11 用の新しい定義済みシステム検索.....	14
強化機能	14
[ファイル] ビューのパフォーマンス強化.....	14
重要な情報.....	15
InstallShield の評価.....	15
InstallShield および InstallShield のアドオンのインストール、および再配布可能ファイルを取得する	15

InstallShield の複数エディションをインストールする	15
InstallShield の複数バージョンをインストールする	15
プロジェクトのアップグレードに関するアラート	16
InstallShield の以前のバージョンで作成されたプロジェクトのアップグレードに関する一般情報	16
ターゲット システムとしてサポートされている Windows のバージョン リストに関する変更	16
Visual Studio のサポートされているバージョン リストに関する変更	16
.spc および .pvk ファイルを使ったデジタル署名サポートの削除	16
InstallShield インストールからの SignTool.exe および Signcode.exe の削除	17
バグ修正	17
InstallShield 2015 SP2 Express Edition	17
InstallShield 2015 SP1 Express Edition	18
InstallShield 2015 Express Edition	19
既知の問題	21
システム要件	21
InstallShield を実行するシステムの要件	21
ターゲット システムの要件	23
法的情報	24

はじめに

InstallShield は、ハイクオリティな Windows Installer または InstallScript ベースのインストール、および Microsoft App-V パッケージをオーサリングできる業界標準ツールです。InstallShield 2015 では、最新テクノロジーを手軽に使用できる新しい機能と強化内容が提供されています。

InstallShield 2015 には、Windows 10 および Visual Studio 2015 のサポートが含まれています。

SP2 に含まれる変更

FlexNet Code Aware との統合

InstallShield には、今回より FlexNet Code Aware との統合が含まれています。FlexNet Code Aware は、製品のセキュリティおよび知的財産 (IP) コンプライアンス リスクを迅速にスキャンする、自動オープン ソース リスク評価およびパッケージ検出ソリューションです。


FlexNet Code Aware の現在のリリースでは、次のファイル分析がサポートされています：

- Java パッケージ
- Node パッケージ
- Nuget パッケージ
- RPM パッケージ
- Ruby パッケージ
- EXE & DLL ファイル

セキュリティ脆弱性は、[National Vulnerability Database \(NVD\)](#) と照合されます。

FlexNet Code Aware を実行する

FlexNet Code には InstallShield とは別のライセンスが必要です。トライアル / 評価版もあります。詳細については、フレクセラ・ソフトウェア Web サイトの [\[FlexNet Code Aware 製品\] ページ](#) を参照してください。

InstallShield 内部から FlexNet Code Aware を実行するには、InstallShield の **[プロジェクト]** メニューから **[FlexNet Code Aware を使ってプロジェクトをスキャン]** をクリックします。このメニュー オプションは、InstallShield プロジェクトが現在開いていない場合は無効です。FlexNet Code Aware アイコン  も、InstallShield 標準ツールバーに表示されます。

FlexNet Code Aware がプロジェクトのスキャンを完了したとき、概要にはスキャン済みファイルの数、オープン ソース パッケージ、ならびに検出された脆弱性の数が表示されます。FlexNet Code Aware のフル ライセンス版では、**[View report (レポートの表示)]** ボタンが使用できます。このレポートで提供される詳細については、「[FlexNet Code Aware レポートの読み方](#)」を参照してください。



FLEXERA SOFTWARE®
FlexNet® Code Aware™

View Report

Click "View Report" to close Code Aware and open the report in a browser.

Files	Packages	Vulnerabilities
 Files Scanned 2,532	 Packages Found 144	 Vulnerabilities Found 167

[View Report](#) [Finish](#)

FlexNet Code Aware レポートの読み方



メモ・FlexNet Code Aware レポートは、トライアル/評価版モードでは使用できません。FlexNet Code Aware のフル ライセンス版が必要です。

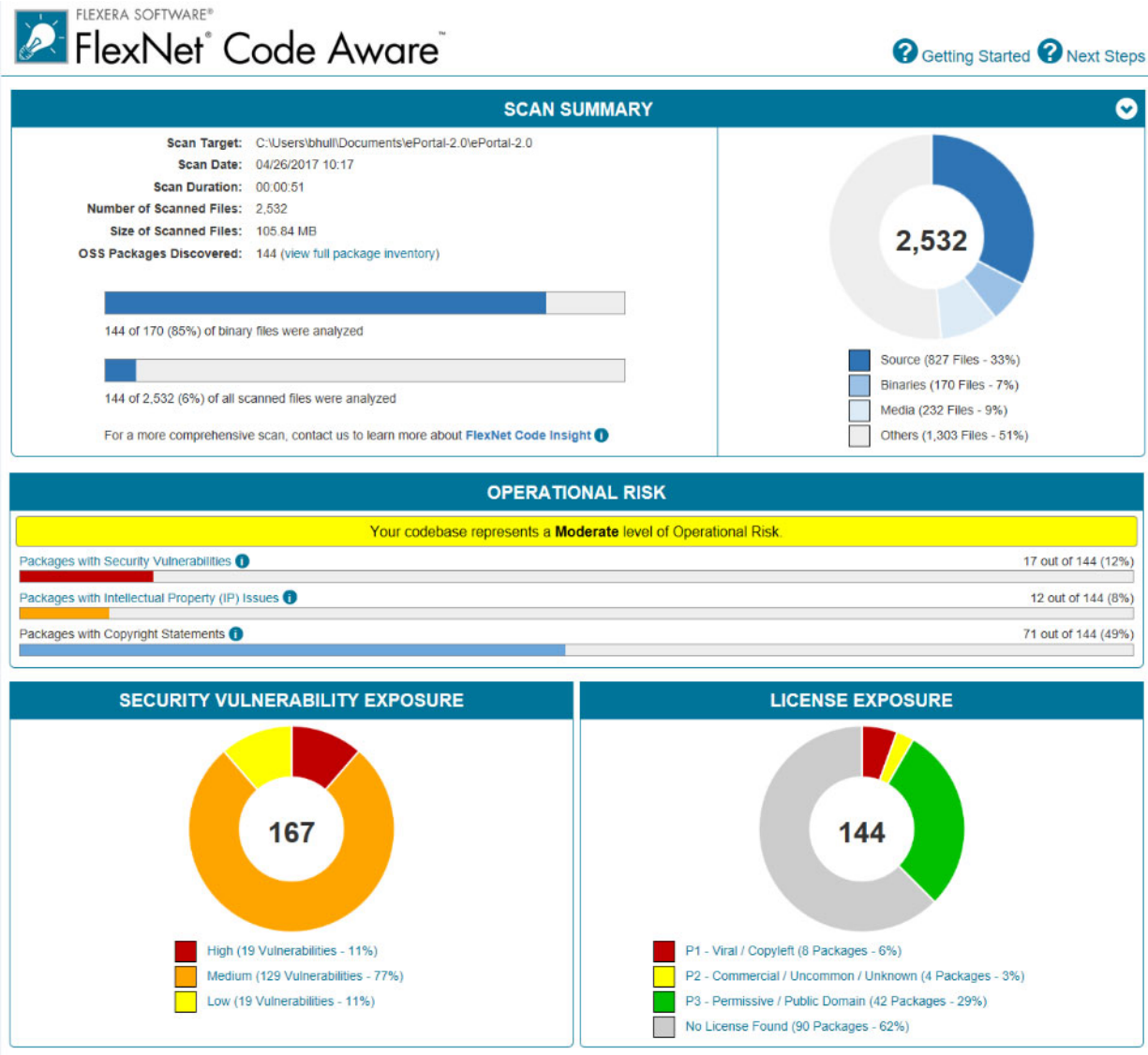
FlexNet Code Aware レポートを参照するためには、FlexNet Code Aware がプロジェクトをスキャンした後に表示される概要ダイアログで **[View report (レポートの表示)]** をクリックします。

FlexNet Code Aware レポートは、いくつかのセクションから構成されています：

- ・ 最初の **[Summary (概要)]** ビューには、**Scan Summary (スキャン概要)**、**Operational Risk (運用リスク)** 評価、**Security Vulnerability Exposure (セキュリティ脆弱性の公開)**、および **License Exposure (ライセンスの公開)** が提示されます。
 - ・ **[Scan Summary (スキャン概要)]** セクションは、ファイル タイプの内訳、分析済みファイルの割合、および検出数を含む、スキャン済みのコードベースについての詳細が表示されます。
 - ・ **[Operational Risk (運用リスク)]** セクションには、パッケージと知的財産 (IP) との問題、およびパッケージとセキュリティ脆弱性の組み合わせに基づいた合成リスク評価が表示されます。
 - ・ **[Security Vulnerability Exposure (セキュリティ脆弱性の公開)]** および **[License Exposure (ライセンスの公開)]** セクションには、識別された問題の種類とカテゴリーの内訳が表示されます。
- ・ **[Package Inventory (パッケージ インベントリ)]** ビューは **[Scan Summary (スキャン概要)]** セクションで **[view full package inventory (フル パッケージ インベントリの表示)]** をクリックすると表示され、検出されたオープンソースおよびサードパーティ パッケージおよび関連ライセンス、セキュリティ脆弱性、依存関係、ならびに検出された著作権ステートメントの完全リストを表示します。

[Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビューには、ターゲットのクエリを実行して、一覧を様々なパッケージの種類に絞り込むためのフィルターが用意されています。

次の図は、サンプル FlexNet Code Aware レポートの最初の [Summary (概要)] ビューを表示します。



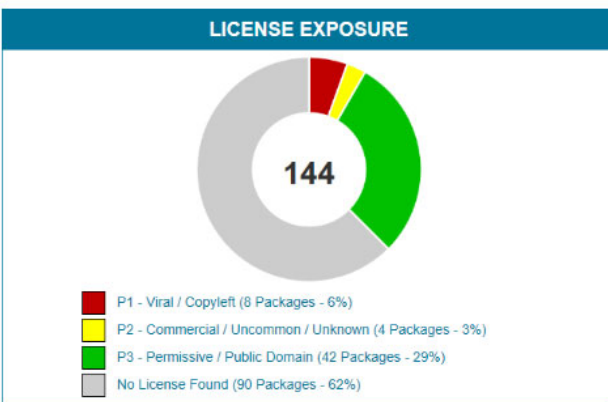
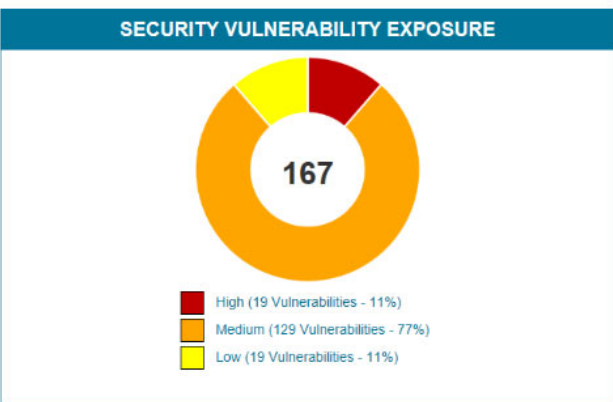
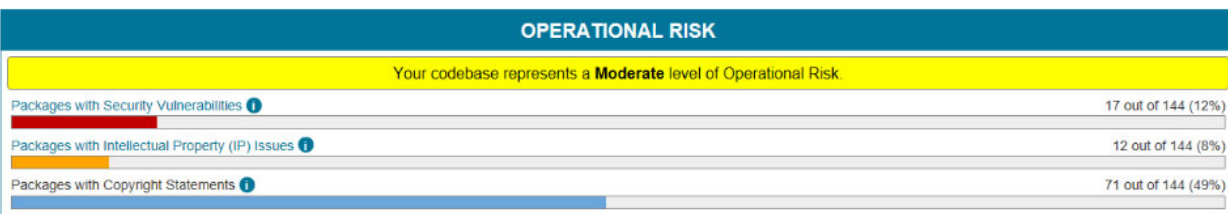
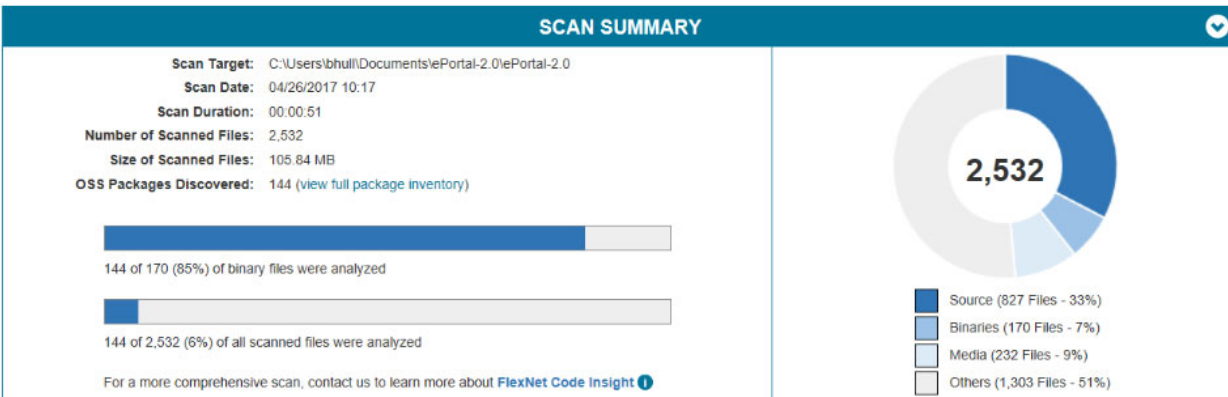


図 -1: FlexNet Code Aware [Summary (概要)] ビュー初期画面

次の図は、サンプル FlexNet Code Aware レポートの [Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビューを表示します。

FlexNet Code Aware Getting Started Next Steps

Search Enter keyword...
 Enter CVE (CVE-XXXX-XXXX)...
 Enter copyright holder

Security Vulnerabilities
 High Severity (CVSS 7.0 - 10.0)
 Medium Severity (CVSS 4.0 - 6.9)
 Low Severity (CVSS 0.0 - 3.9)

Detected Licenses
 P1 - Viral / Copyleft
 P2 - Commercial / Uncommon / Unknown
 P3 - Permissive / Public Domain
 No License Found

Apply Or Criteria Filter Reset

Licenses Legend: P1 - Viral / Copyleft P2 - Commercial / Uncommon / Unknown P3 - Permissive / Public Domain
 Vulnerabilities Legend: High Severity (CVSS 7.0 - 10.0) Medium Severity (CVSS 4.0 - 6.9) Low Severity (CVSS 0.0 - 3.9)

Browsing 1-10 of 144 Packages

Package	License	Vendor	Vulnerabilities	# Copyrights
mysql_connector_c 5.1.7	No License Found	Mysql	94 High 5 Medium 71 Low 18 Other	None Found
struts 1.2.7	Apache-2.0	Apache	7 High 2 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Springsource	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Pivotal_software	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found
spring_framework 3.0.5.RELEASE	Apache-2.0	Springsource	6 High 1 Medium 5 Low 0 Other	None Found

10 1 2 3 4 5 ... 15

図 -2: FlexNet Code Aware [Package Inventory (パッケージ インベントリ)] ビュー

パッケージの詳細を確認する

[Package Inventory (パッケージ インベントリ)] レポート ページの [Vulnerabilities (脆弱性)] 列にある脆弱性カウントをクリックして、各パッケージの詳細を確認します：


Vulnerabilities





7 High 2 Medium 5 Low 0 Other

6 High 1 Medium 5 Low 0 Other

パッケージ インベントリ レポートの一部が含まれた [Vulnerabilities detail (脆弱性の詳細)] が表示されます:

struts 1.2.7

Name struts 1.2.7
Version 1.2.7
License  Apache-2.0

Vulnerabilities  7 |  2 |  5 |  0

Description The core of the Struts framework is a flexible control layer based on standard technologies like Java Servlets, JavaBeans, ResourceBundle, and Extensible Markup Language (XML), as well as various Jakarta Commons packages. Struts encourages application architectures based on the Model 2 approach, a variation of the classic Model-View-Controller (MVC) design paradigm. Struts provides its own Controller component and integrates with other technologies to provide the Model and the View. For the Model, Struts can interact with any standard data access technology, including Enterprise Java Beans, JDBC, and Object Relational Bridge. For the View, Struts works well with JavaServer Pages, including JSTL and JSF, as well as Velocity Templates, XSLT, and other presentation systems. The Struts framework provides the invisible underpinnings every professional web application needs to survive. Struts helps you create an extensible development environment for your application, based on published standards and proven design patterns.


Path C:\Users\bhull\Documents\Portal-2.0\Portal-2.0\extras\struts-1.2.7\contrib\struts-el\lib\struts.jar
C:\Users\bhull\Documents\Portal-2.0\Portal-2.0\extras\struts-1.2.7\lib\struts.jar

Evidence Type pom.xml


Maven GAV struts:struts:1.2.7

Vendor Apache

Copyrights None Found

Security Vulnerabilities 

CVE ID: [CVE-2006-1547](#)

Severity:  High

CVSS Score: 7.8

バグ修正 SP2

InstallShield 2015 SP1 で解決された問題については、「[InstallShield 2015 SP2 Express Edition](#)」を参照してください。

SP1 に含まれる変更

Windows 10 のサポート

InstallShield は、Windows 10 をサポートします。

Microsoft Visual Studio 2015 のサポート

InstallShield は、Visual Studio 2015 をサポートします。このバージョンの Visual Studio 内部から InstallShield プロジェクトを作成できます。

Microsoft App-V 5.1 のサポート

InstallShield の Microsoft App-V アシスタントには、Microsoft App-V 5.1 クライアント上で実行できる仮想アプリケーションを作成するためのサポートが含まれています。

新しい App-V 5.1 用 InstallShield 前提条件

InstallShield には、生成された App-V 5.x パッケージに setup.exe を含めるときに使用できる、新しい InstallShield 前提条件が含まれています。InstallShield 前提条件をリリースに含める必要がある場合、Setup.exe セットアップランチャーが必要になることに注意してください。

- Microsoft App-V 5.1 Desktop Client

この InstallShield 前提条件用の再配布可能ファイルは Microsoft から入手しなくてはならないため、InstallShield 内部からダウンロードすることはできません。Microsoft から再配布可能ファイルを手にした後、InstallShield 前提条件エディターで前提条件を編集するときに表示される場所に配置してください。必要な前提条件についての詳細は、<https://technet.microsoft.com/ja-jp/library/mt346482.aspx> を参照してください。

App-V アシスタントの [オペレーティング システム] オプションについて、App-V 5.x バージョン用に Windows 10 を追加

App-V 5.1 より、Windows 10 32 ビット版および 64 ビット版のオペレーティング システムがサポートされています。これに伴い、Microsoft App-V アシスタントの [パッケージ情報] ページで、App-V 5.x が選択されている際に選択可能なオペレーティングシステムとして次が追加されました：

- Windows 10 (32 ビット版)
- Windows 10 (64 ビット版)

Microsoft Visual C++ 2015 および .NET Framework 4.6 用の新しい InstallShield 前提条件

InstallShield には、アドバンスド UI、基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、およびスイート / アドバンスド UI プロジェクトに追加可能な新しい前提条件が含まれています：

- Microsoft Visual C++ 2015 再配布可能パッケージ (x86)
- Microsoft Visual C++ 2015 再配布可能パッケージ (x64)
- Microsoft .NET Framework 4.6 Full
- Microsoft .NET Framework 4.6 Web

これらの前提条件は、サポートされているターゲット システムに適切なテクノロジーをインストールします。

DialogSetInfo 関数の新しい定数

InstallScript 関数 DialogSetInfo の nInfoType パラメーターに新しい定数が使用できます：

DLG_INFO_ALTIMAGE_HIDPI— この定数は、ダイアログで高 DPI イメージを指定します。高 DPI イメージは BMP、GIF、JPEG、PNG、および TIFF をサポートします。透明化が必要な場合、それをサポートする PNG などのイメージ タイプを使い、ダイアログ内で szInfoString が表示するイメージの名前（オプションでパスを含むことが可能）を指定します。このパラメーターは、ダイアログの左側にある標準インストール イメージを表示する ダイアログすべてに適用されます。

DLG_INFO_ALTIMAGE_HIDPI が nInfoType で渡される場合、次のパラメーター値が必要です：

- szInfoString— 表示するイメージ ファイルの名前。オプションでパスを含めることもできます。ファイルが指定されなかった場合、SUPPORTDIR に存在するものと見なされます。ファイルが存在しない場合は、DialogSetInfo が ISERR_FILE_NOT_FOUND を返します。
- nParameter— DPI 拡大 / 縮小率。たとえば、200% 拡大する場合 200、150% の場合 150 など。サポートされている最小縮小値は 25 です。この値に 0 が渡された場合、イメージは何も表示されません。If DLG_INFO_ALTIMAGE_REVERT_IMAGE が渡されると、以前に使用されたイメージが表示されます。

この関数は、InstallScript プロジェクトおよび InstallScript MSI プロジェクトの InstallScript イベントで使用できます。

アーキテクチャの検証を無効化するオプションの追加

[リリース] エクスプローラーの [アーキテクチャの検証] オプションに [なし] オプションが追加され、ビルド時にアーキテクチャの検証をバイパスすることを指定できるようになりました。

バグ修正 SP1

InstallShield 2015 SP1 で解決された問題については、「[InstallShield 2015 SP1 Express Edition](#)」を参照してください。

新しい機能

InstallShield 2015 Express Edition には、以下のような新しい機能が搭載されています。

- [Windows 10 ベース システムのサポート](#)
- [デジタル署名の強化機能](#)
- [64 ビット開発システム上で、ソース マシンのレジストリの 32 ビットおよび 64 ビット領域の両方を表示できる機能](#)
- [新しい Microsoft Visual C++ 2013、.NET Framework 4.5.2 その他用の InstallShield 前提条件](#)
- [Internet Explorer 10 および 11 用の新しい定義済みシステム検索](#)

Windows 10 ベース システムのサポート

InstallShield は、Windows 10 をサポートします。

Windows 10 をターゲットにする

Windows 10 が搭載されているシステム上では、Windows Installer プロパティ VersionNT および VersionNT64 が 603 を示します。これは、もともと Windows 8.1 のバージョン番号として使用されたものです。従って、Windows 10 をターゲットに特定して .msi パッケージの条件を作成することは不可能です。

Windows Installer 5.0 および Windows 7 より、.msi パッケージの DLL アクションには shim が適用されるため、オペレーティング システム バージョンの取得が阻止されます。API の GetVersion、GetVersionEx、および RtlGetVersion は、もともと Windows Vista のバージョン番号である 6.0.6000 を返します。従って、DLL カスタム アクションから実際の Windows のバージョン番号を取得することはできません。

前述の Windows Installer 動作のため、.msi パッケージが実行中のバージョンを検出することは容易ではありません。ターゲット システムの OS 要件を指定できる領域、たとえばプロジェクト アシスタントの [インストール要件] ページ、または [要件] ビューでは、新しい実行時の動作を反映するように、[Windows 8.1] オプションの名前が「**Windows 8.1** または **Windows 10**」に変更されました。

Windows 10 にインストール可能な InstallShield 前提条件は、必要に応じて、これらのシステムにインストールされるように更新されています。以前これらのシステムでは、前提条件がデフォルトで実行されない場合があります。

デジタル署名の強化機能

InstallShield には、ビルド時にインストールおよびファイルにデジタル署名を行うための、いくつかの強化機能が含まれています。

SHA-256 デジタル証明書のサポート

InstallShield では、インストールおよびファイルをビルド時に署名する際、SHA-256 ハッシュ アルゴリズムを使ったデジタル証明書を使用できます。

SHA-1 はセキュリティの脆弱性があるため、SHA-256 の使用が推奨されます。Microsoft は、Windows では 2016 年 1 月以降に SHA-1 証明書を使って署名およびタイムスタンプが追加されているアイテムを信頼しないことを発表しました。さらに、証明書を発行する組織である証明機関では、SHA-1 証明書が段階的に廃止されます。したがって、InstallShield プロジェクトに含まれる任意の SHA-1 証明書は、SHA-256 証明書と置き換えることが推奨されます。最新情報および特定の詳細については、証明機関にお問い合わせください。

InstallShield でリリースに署名するための SHA-1 証明書を SHA-256 証明書に置き換えるには、[リリース]ビューの[署名]タブを使って、現在の証明書への参照を SHA-256 証明書と置き換えます。

プロジェクトで、SHA-256 証明書を使った署名が構成されている場合、InstallShield はビルド時に署名を行うファイルの署名に SHA-256 ハッシュを使用します。プロジェクトで SHA-1 証明書を使った署名が構成されたままになっている場合、InstallShield は SHA-1 ハッシュを使用します。また、SHA-1 証明書を使用すると、今回より SHA-1 の使用についてアラートするビルド警告 -7346 が発生します。

InstallShield の以前のバージョンでは、SHA-1 または SHA-256 証明書のいずれかを使って署名が行なわれる際、ファイルの署名に SHA-1 ハッシュが使用されました。

証明書を参照するときに証明書ストアを使用できる機能

ファイルおよびインストールの署名に使用するデジタル署名情報を指定するとき、InstallShield では今回より、使用する証明書を含む証明書ストアを参照することができます。このサポートは、マシン上の .pfx 証明書ファイルを指定する方法の代替として提供されています。

証明書ストアまたは .pfx 証明書を使うかどうかを指定するには、[リリース]ビューの[署名]タブにある“デジタル証明書ファイル”設定を使用します。この設定で省略記号ボタン(...)をクリックすると、新しい[証明書の選択]ダイアログ ボックスが開きます。このダイアログ ボックスを使って、ストア名 (Personal、Trusted Root Certification Authorities、Enterprise Trust、Intermediate Certification Authorities)、ストアの場所 (ユーザー、マシン)、および特定の証明書を識別するためのサブジェクトといった情報を指定することができます。別の方法として、このダイアログ ボックスで使用する .pfx ファイルの名前とパスを指定することもできます。

ストアにパスワード付きでインポートされた証明書をプロジェクトで使用するよう構成すると、ビルド時、InstallShield がプロジェクトのファイルに署名を行うときに、Windows がパスワードをプロンプトします。Windows が使用する強力なキー保護のため、InstallShield がパスワードを暗号化サービス プロバイダーに提供することはできません。

証明書ストアを、QuickPatch の署名に使用することもできます。QuickPatch パッケージで証明書ストアまたは .pfx 証明書情報を指定するには、QuickPatch プロジェクトで[一般情報]ビューの[ビルドの設定]領域を使用します。この領域には、新しいサポートを含む[デジタル署名]タブがあります。

InstallShield では、今回より .spc および .pvk ファイルを使った署名がサポートされていません。

UAC ダイアログ ボックスにプログラム名を指定できる機能

[リリース]ビューの[署名]タブには、“署名の説明”設定があります。この設定を使って、ビルド時に InstallShield が署名を行なう Setup.exe ファイル、.msi ファイル、その他のインストール ファイルの UAC ダイアログ ボックスで“プログラム名:”ラベルの右側に表示するテキストを指定します。UAC ダイアログ ボックスは、エンドユーザーが署名されたファイルを起動したとき、昇格された権限が必要な場合に開きます。

“署名の説明”設定を空白のままに残すと、InstallShield は UAC ダイアログ ボックスのテキストとして、ファイル名を拡張子なしで使用します。

この機能によって、IOA-000080318、IOC-000089619、および IOJ-1700927 の問題が解決されます。

64 ビット開発システム上で、ソース マシンのレジストリの 32 ビットおよび 64 ビット領域の両方を表示できる機能

InstallShield を 64 ビット開発システム上で使用する場合、InstallShield が表示する [レジストリ]ビューは、使用中のマシンのレジストリの 32 ビットおよび 64 ビット領域の両方を表示します：

- HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software
- HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Wow6432Node

このサポートによって、このビューのインストール先ペインの適切な領域にソース領域からのエントリをドラッグ アンド ドロップできるようになるため、64 ビット マシン上でのインストールの開発が容易になります。

以前、64 ビット開発システム上で InstallShield を使用した場合、InstallShield の [レジストリ]ビューのソース ペインにはレジストリの HKLM¥Software 部分にある 64 ビットデータが表示されませんでした。さらに、ソース ペインには、マシンの HKLM¥Software¥Wow6432Node 領域の 32 ビットデータが HKLM¥Software 領域に表示されました。

インストールで 32 ビット領域へのリダイレクトを行わずに 64 ビット ターゲット システム上の 64 ビット領域にレジストリ データをインストールする場合、レジストリ データを [レジストリ]ビューのインストール先ペインにある HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE (64 ビット) ノードに配置しなくてはなりません。[レジストリ]ビューのソースペインから 64 ビット データを、ビュー内の 64 ビット以外のインストール先ペインにドラッグするだけでは、そのコンポーネントが 64 ビットであるとマークされません。

新しい Microsoft Visual C++ 2013、.NET Framework 4.5.2 その他用の InstallShield 前提条件

InstallShield には、作成中のプロジェクトに追加することができる以下の新しい InstallShield 前提条件が含まれています：

- Microsoft Visual C++ 2013 再配布可能パッケージ (x86)
- Microsoft Visual C++ 2013 再配布可能パッケージ (x64)
- Microsoft .NET Framework 4.5.2 (完全版)

- Microsoft .NET Framework 4.5.2 (Web インストーラー)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 (x86)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 (x86 & x64Wow)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 (x64)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 LocalDB (x86)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 LocalDB (x64)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 Management Objects (x86)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 Management Objects (x64)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 System CLR Types (x86)
- Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 System CLR Types (x64)
- Windows 7 (x86) 用 Internet Explorer 11.0
- Windows 7 と Windows Server 2008 R2 (x64) 用の Internet Explorer 11.0
- Microsoft ReportViewer 2012

これらの前提条件は、サポートされているターゲットシステムに適切なテクノロジーをインストールします。

Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 前提条件は、Microsoft SQL Server 2012 Express SP1 前提条件にとって代わります。

この機能によって IOJ-1701054 および IOJ-1726208 の問題が解決されます。

Internet Explorer 10 および 11 用の新しい定義済みシステム検索

InstallShield には、ターゲットシステム上で Internet Explorer 10 または Internet Explorer 11 を確認する新しい定義済みのシステム検索が含まれています。インストールまたはプロジェクトでこれらのバージョンのどちらかが必要な場合、[要件]ビューまたはプロジェクト アシスタントの [インストール要件] ページを使って、これらのシステム検索の 1 つをプロジェクトに追加することができます。エンドユーザーがインストールを起動すると、Windows Installer はターゲットシステムの要件が満たされているかどうかを確認します。要件が満たされていない場合、インストールでシステム検索用に定義されているエラー メッセージが表示されます。

強化機能

[ファイル] ビューのパフォーマンス強化

サイズが大きいプロジェクトの [ファイル] ビューををより短時間でロードできるように、InstallShield が強化されています。

この強化により IOJ-1667312 が解決されます。

重要な情報

InstallShield の評価

InstallShield のライセンスを購入していなくても、InstallShield をインストールし、アクティベーションを行わずに一定の期間使用することができます。アクティベーションを行わずに使用すると、InstallShield は一部の機能が制限された評価モードで起動します。詳細については、ナレッジベース記事「[Q200900](#)」を参照してください。評価版の制限は、InstallShield がアクティベートされたとき、またはライセンス サーバーに接続して、そのライセンスがチェックアウトされたときに解除されます。

InstallShield および InstallShield のアドオンのインストール、および再配布可能ファイルを取得する

次のインストールは、[\[InstallShield のダウンロードおよびライセンスの使用\]](#) に記述されている通り、フレクセラ・ソフトウェア製品 & ライセンス センターからダウンロードが可能です：

- InstallShield
- 再配布可能ファイル（たとえば、InstallShield 前提条件）
- Standalone Build、InstallShield Collaboration、および InstallShield MSI ツールなどのアドオン（使用可能な場合）
- FlexNet Licensing Server ソフトウェア（同時接続ライセンスを購入した場合で、組織のライセンスサーバーを設定する必要がある場合）
- InstallShield サービス パック（使用可能な場合）

InstallShield の複数エディションをインストールする

InstallShield 2015 の Premier、Professional、または Express Edition の中から、同じシステム上に同時に 1 つのエディションのみをインストールできます。また、InstallShield 2015 DIM Editor を、InstallShield 2015 の任意のエディションが搭載されている同じマシン上にインストールすることはできません。

Microsoft Visual Studio の統合は 1 回につき InstallShield の 1 バージョンとのみ可能です。システムで最後にインストールまたは修復された InstallShield のバージョンが Visual Studio の統合に使用されます。

InstallShield の複数バージョンをインストールする

InstallShield 2015 は、同じマシン上で別のバージョンの InstallShield と共存することができます。

プロジェクトのアップグレードに関するアラート

以下は、InstallShield 2014 Express Edition 以前のバージョンで作成されたプロジェクトを InstallShield 2015 Express Edition にアップグレードする際に発生する可能性のある問題についての情報です。また、新しい InstallShield 2015 Express Edition プロジェクトと、InstallShield 2014 Express Edition 以前のバージョンから InstallShield 2015 Express Edition にアップグレードされたプロジェクト間の潜在的な動作の違いについてもアラートします。

InstallShield の以前のバージョンで作成されたプロジェクトのアップグレードに関する一般情報

InstallShield 2015 Express Edition を使って以前のバージョンで作成されたプロジェクトを開くと、InstallShield 2015 Express Edition プロジェクトを新しいバージョンに変換するかどうかを質問するメッセージボックスが表示されます。[変換する]を選択すると、変換が行われる前に、例えば .775 というファイル拡張子が付加されたプロジェクトのバックアップコピーが作成されます。以前のバージョンの InstallShield でこのプロジェクトを再度開く場合、元のプロジェクトのファイル名から .775 を取り除いてください。InstallShield 2015 Express Edition プロジェクトを以前のバージョンの InstallShield で開くことはできないので注意してください。

InstallShield Express Edition バージョン (InstallShield 2014 Express Edition 以前、InstallShield 12 Express Edition 以前、および InstallShield Express 5 以前) で作成した既存プロジェクトを InstallShield 2015 Express Edition にアップグレードすることができます。InstallShield MultiPlatform または InstallShield Universal で作成されたプロジェクトは InstallShield 2015 Express Edition にアップグレードすることはできませんの注意してください。

ターゲット システムとしてサポートされている Windows のバージョン リストに関する変更

今回より、Windows XP SP3 および Windows Server 2003 SP2 が、InstallShield で作成されたインストールを実行するターゲット システムに必要な Windows の最低バージョンです。

Visual Studio のサポートされているバージョン リストに関する変更

InstallShield Express Edition と統合することが可能な最も古い Visual Studio バージョンは Visual Studio 2010 となります。InstallShield は今回より、Visual Studio 2008 との統合をサポートしません。

.spc および .pvk ファイルを使ったデジタル署名サポートの削除

InstallShield で、ビルド時に .spc および .pvk ファイルにデジタル署名を行うサポートは、今後使用できません。

InstallShield 2014 Express Edition 以前で、リリースまたは QuickPatch パッケージに .spc および .pvk ファイルを使って実行時にデジタル署名を行うように構成済みで、そのプロジェクトを InstallShield 2015 Express Edition で開こうとすると、アップグレード警告 -6048 (リリース) または -6050 (QuickPatch プロジェクト) が表示されます。この警告は、アップグレード中に InstallShield によって .pvk ファイルおよび関連パスワードがプロジェクトから削除されることを説明します。

InstallShield 2015 Express Edition でリリースまたはパッチを正しくビルドするためには、そのリリースまたは QuickPatch プロジェクトから .spc の参照を削除する必要があります。これを、.pfx 証明書または証明書ストアにある証明書への参照と入れ換えることができます。

.spc の参照を削除せずにリリースまたはパッチのビルドを試みると、.spc ファイルの削除が必要であることを通知するビルド エラー -7347 が表示されます。

.spc ファイルおよび .pvk ファイルを .pfx ファイルに変換する方法については、InstallShield ヘルプ ライブラリの「デジタル署名とセキュリティ」を参照してください。

InstallShield インストールからの SignTool.exe および Signcode.exe の削除

InstallShield をインストールしたとき、今回より SignTool.exe および Signcode.exe は開発マシンにインストールされません。手動でファイルにデジタル署名を行う場合、SignTool.exe の使用を考慮してください。SignTool.exe は、Microsoft Windows Software Development Kit (SDK) に含まれていて、Visual Studio と共にインストールされます。

バグ修正

このセクションには、InstallShield の以下のバージョンで修正された顧客の問題が掲載されています：

- [InstallShield 2015 SP2 Express Edition](#)
- [InstallShield 2015 SP1 Express Edition](#)
- [InstallShield 2015 Express Edition](#)

InstallShield 2015 SP2 Express Edition

InstallShield 2015 SP2 Express Edition では、次の問題が解決されています。

問題番号	問題の概要
IOA-000081824	フレクセラ・ソフトウェア ナレッジベースに記事「 Best Practices to Avoid Windows Setup Launcher Executable Issues (Windows セットアップ ランチャー実行可能ファイルの問題を回避するためのベスト プラクティス) 」が追加されました。以前のバージョンで使用可能な関連ホットフィックスは、このリリースに含まれています。

問題番号	問題の概要
IOJ-1740227	同じ証明書ストアに類似するサブジェクトを持つ2つのデジタル証明書が存在する場合、選択された証明書のみがセットアップの署名に使用されます。以前、このシナリオでは、同じインスタンスに誤った証明書を使って署名が行われたため、矛盾した結果が発生しました。
IOJ-1823819、 IOJ-1742556	InstallShield は Visual Studio 2013 Update 5 との統合をサポートします。以前、InstallShield 2015 SP1 と Visual Studio 2013 Update 5 とを統合すると、ソリューションをクリックして様々なビューにアクセスしたり、Visual Studio 2013 Update 5 を使ってビルドを行うことができませんでした。
IOJ-1740162	InstallShield 2015 SP1 にアップグレードした後、特定のプロジェクトがビルド中にクラッシュする原因となる問題が解決されました。
IOJ-1739755	InstallShield を Windows 10 Hyper-V Server でアクティベートしたときに、InstallShield アクティベーションの不具合の原因となる問題が解決されました。以前、エラーメッセージとして「エラー 0: シリアル番号のアクティベーション [シリアル] に失敗しました」が表示されました。この修正によって、InstallShield のアクティベーションが正しく完了します。
IOJ-1777700	Visual Studio でビルドされたプロジェクトの一部で発生した致命的なビルド エラー -4340 (内部ビルド エラー) の原因が解決されました。

InstallShield 2015 SP1 Express Edition

InstallShield 2015 SP1 Express Edition では、次の問題が解決されています。

問題番号	問題の概要
IOJ-1736989	InstallShield 2014 と InstallShield 2015 が同じマシン上にインストールされている場合にも、InstallShield 2014 の修復機能が正しく動作します。
IOJ-1735718	Windows アップデート KB3072630 がインストールされている場合でも、HKEY_CURRENT_USER の下にあるレジストリ アクセス許可の変更が、正しく処理されます。
IOJ-1735304	プロジェクトを作成して Microsoft ReportViewer 2012 前提条件を含める場合、MicrosoftReportViewer 2012 前提条件ファイルをエラーなしで正しくダウンロードすることができます。
IOJ-1734790	プロジェクトに破損した .isproj を保存しようとする時、破損した .isproj ファイルは同じフォルダー内に .isproj.bak ファイルとしてバックアップされ、新しい .isproj ファイルと置換されます。

問題番号	問題の概要
IOJ-1734069	[ファイル]ビューの[インストール先コンピューターのファイル]ペインに複数の DLL ファイルまたは .exe ファイルを追加した後、Windows ファイル エクスプローラーでタイムスタンプが変更されるようにファイルを変更した場合、今回より、Windows ファイル エクスプローラーに反映される最も新しいタイムスタンプに正確に更新されます。
IOJ-1733677	InstallShield を Visual Studio に統合したとき、[ファイル]ビューが正しく開きません。以前、一部のプロジェクトでこのビューを開いたときにハングまたはクラッシュすることがありました。
IOJ-1733016	MSBuild から .NET 2.0 アセンブリを含むプロジェクトをビルドしたときに、ビルドエラー -6212 または -7325 が発生する問題が解決されました。
IOJ-1737768	InstallShield 2015 の ReportViewer 2012 前提条件に関する更新済みの依存関係ファイルが含まれています (Microsoft SQL Server 2012 Express SP2 System CLR Types (x86).prq)。ReportViewer 2012 を選択すると、依存する .prq が検出され、正しくダウンロードが行われます。
IOJ-1737004	Microsoft .NET 4.6 が搭載されたマシン上で .NET インストーラー クラスを含むセットアップをビルドした場合、今回より、インストーラー クラスが正しくインストールされます。

InstallShield 2015 Express Edition

InstallShield 2015 Express Edition では、次の問題が解決されています。

問題番号	問題の概要
IOA-000059322	インストールが 64 ビット システム上で SysWow64 フォルダー内にパッケージをキャッシュする場合、今回より、適切なシステムフォルダーからそれが実行されます。以前、Windows の一部の 64 ビット バージョンでは、インストールが System32 フォルダーからキャッシュされたパッケージを実行しようとしていました。
IOA-000073755	DVD または CD などのメディア上にある Setup.exe ファイルに /runfromtemp コマンドライン パラメーターを渡すとき、インストーラーにソース メディアからコピーするように構成された InstallShield 前提条件が含まれている場合、「インストール要件 <i>MyPrerequisite</i> のファイルが見つかりませんでした。」などのエラーと共に前提条件のインストールが失敗することがなくなりました。
IOJ-1663050	InstallShield ヘルプ ライブラリの「INSTALLDIR のレジストリからの設定」ヘルプ トピックには、今回より正しいレジストリ パスのサンプルが含まれています。以前、パスに誤字が含まれていました。

問題番号	問題の概要
IOJ-1660957	日本語バージョンの IDS_PREVENT_DOWNGRADE_EXIT 文字列エントリの値全体が、実行時に正しく表示されるようになりました。以前、文字列エントリの一部が切り詰めて表示されました。
IOJ-1661825	日本語版の ISCmdBld.exe を使ってコマンドラインからビルドを行ったとき、今回よりコマンドプロンプトウィンドウおよびビルドログファイルに、日本語の文字が正しく表示されます。
IOJ-1662504	文字列「Welcome to the InstallShield Wizard for [ProductName]」の正しい翻訳が、デフォルトのイタリア語実行時文字列に組み込まれています。以前、イタリア語の文字列は「InstallShield Wizard for [ProductName]」の翻訳でした。
IOJ-1664029	Setup.exe をコマンドラインから起動するときに /? をに渡すと表示されるヘルプテキストで、サイレントモードのサンプル (/s /v/qn) の後にピリオドが表示されることがなくなりました。
IOJ-1664860	「再配布可能ファイルの出荷」ヘルプトピックには、InstallShield 使用許諾契約に基づいて使用可能な再配布可能ファイルのリストに、今回より SetupPrereq.exe ファイルが含まれています。
IOJ-1665357	InstallShield Express Edition は MSI デバッガーをサポートしません。そのため、Visual Studio 内部から InstallShield プロジェクトで作業を行う場合、Visual Studio の [デバッグ] メニューにある [デバッグの開始] コマンドが無効となりました。さらに、この状況下で F5 を押したときに、InstallShield Express Edition では前提条件エディターが使用できないことを通知するエラーを表示することがなくなりました。
IOJ-1700869	GAC 内の .NET 4.0 に依存するファイルの “ビルド時に .NET をスキャン” 設定で依存関係オプションを選択すると、今回より InstallShield がビルド時にアセンブリを見つけます。以前、InstallShield はアセンブリを見つけられず、依存関係ファイルまたは依存関係の 1 つが見つからなかったことを通知するビルド警告 -6248 が表示されました。
IOJ-1721109	<p>次の InstallShield 前提条件に構成された条件が訂正されています：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Microsoft Visual C++ 2010 再配布可能パッケージ (x86) ・ Microsoft Visual C++ 2010 再配布可能パッケージ (x64) <p>Windows 8 および Windows Server 2012 以降は、これらのパッケージをサポートしません。従って今回より、前提条件はこれらのプラットフォームをターゲットにしません。</p>

問題番号	問題の概要
IOJ-1721241	一部の実行時の言語について、ユーザー インターフェイス上で表示される翻訳されたエラー メッセージから、エラー コードが不足している問題が解決されました。以前、実行時の文字列にはエラー コードが2つの中かっこ ({}) で囲まれていました。中かっこに囲まれたテキストは、ログ ファイルでのみ表示され、UI では表示されませんでした。
IOJ-1726115	InstallShield ヘルプ ライブラリの索引および検索の問題が解決されました。[索引] タブで Windows Instaler ヘルプのエントリが正しく表示されます。また、[検索] タブに再び正しく検索結果が表示されるようになりました。

既知の問題

既存の問題一覧は、<http://support.installshield.com/kb/view.asp?articleid=000017929> を参照してください。

システム要件

このセクションでは、InstallShield で作成されたインストールを実行するターゲット システム (ランタイム環境) の要件、ならびに InstallShield を実行するために必要なシステム (オーサリング環境) の要件が説明されています。

InstallShield を実行するシステムの要件

InstallShield は、これらのオペレーティング システムの最も新しいパッチおよびサービス パックが適用されている最新版で実行します。

項目	説明
プロセッサ	Pentium III クラスの PC (500 MHz 以上を推奨)
RAM	256 MB の RAM (512 MB 推奨)
ハードディスク	500 MB 空き領域
ディスプレイ	1024 x 768 (XGA) 以上の解像度

項目	説明
オペレーティング システム	<ul style="list-style-type: none"> ・ Windows Vista ・ Windows Server 2008 ・ Windows 7 ・ Windows Server 2008 R2 ・ Windows 8 ・ Windows Server 2012 ・ Windows 8.1 ・ Windows Server 2012 R2 ・ Windows 10
権限	システムの管理者権限
マウス	Microsoft IntelliMouse、またはその他の互換性があるポインティング デバイス
InstallShield と Visual Studio との統合 (オプション)	<p>Microsoft Visual Studio の以下のバージョンを InstallShield Premier Edition または Professional Edition に統合することができます :</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Visual Studio 2008 ・ Visual Studio 2010 ・ Visual Studio 2012 ・ Visual Studio 2013 ・ Visual Studio 2015 <p>Visual Studio のこれらのバージョンの以下のエディションは、InstallShield Premier または Professional Edition に統合することができます :</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Professional ・ Premium ・ Ultimate

ターゲット システムの要件



プロジェクト・スイート (アドバンスド Ui、およびスイート / アドバンスド UI プロジェクト タイプ) 以外のすべてのプロジェクトの種類では、Windows XP SP3 および Windows Server 2003 SP2 が、InstallShield で作成されたインストールを実行するターゲット システムに必要な Windows の最低バージョンです。スイートの場合、Windows Vista および Windows Server 2008 がターゲット システム上で必要とされる Windows の最低バージョンです。

ターゲット システムは、次のオペレーティング システムの最低要件を満たさなくてはなりません：

- Windows XP SP3
- Windows Server 2003 SP2
- Windows Vista
- Windows Server 2008
- Windows 7
- Windows Server 2008 R2
- Windows 8
- Windows Server 2012
- Windows 8.1
- Windows Server 2012 R2
- Windows 10

ターゲット システムで、SSE2 インストラクション セットがサポートされていることが必須です。

法的情報

著作権情報

Copyright © 2017 Flexera Software LLC.All Rights Reserved.

この出版物には、Flexera Software LLC およびそのライセンサーによって所有されている機密情報、創造的な製作物が含まれています。本出版物の一部または全部を、Flexera Software LLC からの事前の書面による明示的許可なしに、使用、複製、出版、配布、表示、改変または転載することはいかなる形態または手段を問わず厳重に禁止いたします。Flexera Software LLC によって書面で明示されている場合を除き、この出版物の所有は、禁反言、黙示などによっても、Flexera Software LLC が所有するいかなる知的財産権の下、ライセンスまたは権利を一切付与するものではありません。

本技術およびそれに関する情報のすべての複製は、Flexera Software LLC より許可されている場合に限り、著作権および所有権に関する通知を完全な形で表示しなければなりません。

知的財産

フレクセラ・ソフトウェアが所有する商標および特許の一覧は、<http://www.flexerasoftware.com/intellectual-property> を参照してください。フレクセラ・ソフトウェア製品、製品ドキュメント、およびマーケティング資料で言及されているその他すべてのブランドおよび製品名は、各社の商標または登録商標です。

(米国内向け) 制限付権利に関する表示

本ソフトウェアは商業用コンピュータソフトウェアです。本ソフトウェアのユーザーまたはライセンス許可対象者が米国政府の代理、部署、その他の関連機関の場合、ソフトウェアまたは技術データおよびマニュアルを含むすべての関連文書の使用、複写、複製、開示、変更、公開、または譲渡に関して、ライセンス契約または本契約の条項ならびに民生機関については連邦調達規則第 12.212 条または軍事機関については国防連邦調達規則補遺第 227.7202 条による制限が適用されます。本ソフトウェアは完全に自費で開発されたものです。その他一切の使用は禁止されています。